



Title	中国人日本語学習者と日本語母語話者における多義動詞「切る」のカテゴリー構造比較：心理実験により意味分析の結果を検証する
Author(s)	王, 鈺
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 75-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85010
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国人日本語学習者と日本語母語話者における多義動詞 「切る」のカテゴリー構造比較

—心理実験により意味分析の結果を検証する—

王 鈺

大阪大学言語文化研究科

〒560-0043 豊中市待兼山町 1-8

Email: wangyu_ogyoku@yahoo.co.jp

概要 本研究では、日本語における典型的な多義動詞「切る」の意味のカテゴリー化はどのようなようになるのか、さらに、学習者と母語話者における「切る」の意味構造にはどのような違いがあるかを明らかにすることを目的とする。力動性という認知理論に基づく意味分析に加え、中国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に心理実験を行い、その質的分析の結果を統計的アプローチから検証した。その結果、意味分析では、「切る」のスーパー・スキーマを抽出し、各意味を4つの意味パターンに再分類した。心理実験では、4つのパターンの妥当性を検証し、さらに検討すべき点を抽出した。また、母語話者と学習者の持つ「切る」の意味構造が異なることが明らかになった。具体的には、母語話者は目的語項の特徴によるまとまったカテゴリー構造を持つのに対し、学習者は、動詞と目的語項の関係を十分に認識せず、本動詞と複合動詞の意味の関連性を捉えにくく、カテゴリーが構造化していない傾向が示された。

キーワード 多義性, 力動性, 分断動詞, カテゴリー化

A comparative study of categorical structures of the polysemous verb *kiru* “cut” between Chinese learners and native speakers of Japanese:

A psychological experiment to verify the semantic analysis

Yu Wang

Graduate School of Language and Culture, Osaka University

1-8 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka, 560-0043 Japan

Abstract The purpose of this study is to investigate how meanings of the typical Japanese polysemous verb *kiru* “cut” are categorized. The study also aims to claim how differently the semantics of *kiru* is perceived between learners and native speakers of the Japanese language. In addition to semantic analysis based on the cognitive theory of force dynamics, I conducted a psychological experiment with native speakers and Chinese learners of Japanese in order to verify the findings from the qualitative analysis through a statistical approach. As a result of semantic analysis, the super-schema of *kiru* was extracted with each meaning reclassified into four semantic patterns. In the psychological experiment, the validity of the four patterns was verified, suggesting a need for further investigation. The experiment revealed that native

speakers and learners have different semantics perception of the verb *kiru*. While native speakers tended to show a relatively more coherent set of semantic categories based on the features of the object argument, learners did not seem to fully recognize the relationship between the verb and the object argument. Learners had difficulty capturing the relationship between the meanings of the main verb and the compound verb with learners' categorization less likely to be structured.

Keywords polysemy, force dynamics, verb of cutting/severing, categorization

1. はじめに

外国語教育において、多義語の習得は非常に難しいとされている。現代日本語における数多くの多義動詞では、切断・分離の意味（以下、分断動詞）を表す「切る」は日本語教育の早い段階で扱われる基本動詞であり、学習者にとって主に二つの習得上の困難がある。

1 点目は、複数の意味をもつ「切る」の各意味とそのつながりに関することである。例えば、「リンゴを切る」は鋭利なナイフで対象をいくつかの部分に分けることである。「トランプを切る」は整理されたトランプを一続きになっているものとして捉え、手で対象を混合するという意味を表す。また、「10 秒を切る」は測定値が基準値である 10 秒を突破することを表し、動作主と道具格が明確ではなく、意味がより抽象的になる。母語話者はこれらの語義をひとつのカテゴリー構造として捉えられるのに対し、中上級学習者にとってさえも、各語義とその間のつながりを自然に理解することは至難の業である。

2 点目は、「切る」との共起制限である。現実世界においては、固体以外のものを切ることは物理的には可能ではないと考えられる。それゆえ、「切る」に関する動作の許容範囲は固体のみと考えられ、固体である場合は「切る」と共起でき、液体や気体である場合は「切る」と共起できないと判断する傾向が見られる。しかし、「泥を切る」、「砂糖を切る」のように、固体であっても「切る」と共起しにくい例が存在し、「野菜の水気を切る」、「飛行機は雲を切って飛ぶ」のように、液体と気体であっても「切る」と共起できる例も少なくない。そのため、「切る」の性質のみで容認度を判断するのは不適切であると考えられる。

そこで、本研究では、分断動詞「切る」を取り上げ、認知言語学の観点からその意味・機能を分析し、学習者と母語話者の持つ「切る」のカテゴリー構造はそれぞれどのようなものかを検討していく。

2. 先行研究

2.1. 多義動詞「切る」の意味分類研究

認知言語学の立場では、多義語はプロトタイプである中心義が何らかの動機づけに基づき語義が拡張し、ひとつの放射状カテゴリーが形成されると考える (Lakoff 1987: 91-114)。多様な意味・機能を持つ多義語の各意味をどのようにカテゴリーと把握するのは重要な問題である。以下、「切る」の意味カテゴリー化と意味分類に関する研究を概観する。

吉村 (2003) は「切る」のプロトタイプの意味を「連結・結合している状態のものを分かつ」

と定義すると同時に、「切る」のスキーマ的意味をほぼ同等に扱い「連結の分断」であると捉えた。また、連続体のどこで分断動作を行うかという点に注目し意味分類を行った。その結果、＜最初（「スタートを切る」など）＞、＜途中（「手を切る」など）＞、＜最後（「押し切る」など）＞という三つのグループが分かれ、切れ目の位置によってメタファーによる意味拡張が生じると指摘した。

許（2008）では、メタファーに加え、文脈的要素と百科事典的知識が語義間の関連性に関わると指摘し、＜別義＞、＜文脈的別義＞、＜百科事典的意味＞の認定を行った。また、一部の語義を類義語である「割る」、「批判する」、「下回る」と比較した結果、「切る」にはこれらの類義語との意味範囲の違いが見られた。

森山（2012）は動詞のコロケーションを重視し、「切る」の中心義を「〔（意志を持つ）人〕が・〔刃物などの道具〕で・〔一続き物〕を・〔（力を加えて）分断する〕」としている。また、森山（2015）は心理的な手法から知見を得て、内省分析による13個の語義を意味拡張の動機づけにより、＜中心義とメトニミー拡張群＞、＜中心義からのメタファー拡張群＞、＜メトニミー拡張義からのメタファー拡張群＞にまとめ、各拡張義と中心義の間の意味拡張経路を明らかにした。

栗田（2018）では視覚スキーマを用い、＜切り分け＞、＜切り取り＞、＜切り捨て＞という動作の三段階による分類を行った。それに加え、複合動詞である「V1+切る」と本動詞の「切る」の意味を同一の意味構造に捉え、複合動詞と本動詞の意味の有契性を示した。

しかしながら、上述の「切る」に関する意味分類の研究は主に各研究者の理論や使用経験に基づいた内省分析のものであるため、意味記述と意味分類などでは一致しないことも多く、プロトタイプとスキーマ的概念との関係の解明には至っていない。これらのみの結果では信頼性と妥当性に疑問が残っていると考えられる。

2.2. 多義動詞の習得研究

第二言語習得研究（SLA）では、従来から語彙習得は文法習得に比べ遅れる状況にある（長友1999:12）。また、実際の海外の日本語教育現場では、授業時間が限られるため、語彙習得は文法習得より軽視される傾向があり、語彙習得は学習者による独学の場合が多い。その際、外国語環境における学習者は教科書の単語リストや辞典で未知の単語を調べている。しかし、教科書や各辞典は、語義間の関連性を明記せず、単に各語義を並べて記述しているものが多くなっている。実際の使用場面を持っていない学習者は丸暗記のみで各語義を習得し、記憶の負担が非常に重くなるだけでなく、長い時間使用しないと忘れてしまう。それゆえ、多様な用法を持つ語の意味を各々習得するより、カテゴリーとして理解させる必要がある（今井1993:243-253）。これらを念頭に、本節では認知言語学の観点からの多義語の習得研究について概観する。

Kellerman（1979:37-57）では、プロトタイプ理論に基づき、オランダ語を母語とする英語学習者にL1であるオランダ語 *breken* をL2である英語 *break* への翻訳可能性判断テストを行った。その結果、L1のプロトタイプ性が高い語義はL2への翻訳がしやすくなる傾向が見られた。また、鐘（2016）はKellerman（1979）を踏まえ、中国人日本語学習者を対象とし、受容性判断調査によ

り、「切る」の各語義においてプロトタイプ性が高い語義のほうが学習者に受容されやすいことを解明した。

今井（1993: 245-253）は多義語の内部的な意味構造と学習者のもつ意味表象に着目し、日本語母語話者に wear の用例を意味の類似性に基づいてグループ分けするように指示した。上位のカテゴリでは、学習者と母語話者は大まかに同様の概念でグループ化しているが、より下位のカテゴリでは、母語話者のもつ意味表象は安定した内部構造を持っているのに対し、学習者の意味表象はまとまりがない構造を持っている。ひとつの原因として、学習者は類似性に基づくメタファーなどの動機づけを理解しにくく、プロトタイプ語義から展開した放射状カテゴリを十分に捉えられないと指摘した。また、松田・黄（2011: 41-57）でも個々の語義間の類似性・近接性による意味拡張を説明するプロトタイプ・アプローチは学習者にとって必ずしも認識しやしくないことを指摘した。何を類似性・近接性と考えるかは母語話者と学習者の言語文化的背景によって異なる可能性があり、学習者は母語話者が認識できる類似性・近接性などを理解しにくい場合が存在する。このため、松田・黄（2011）は異文化理解を射程に入れた語彙指導を提案し、プロトタイプ・アプローチを採用せず、日本語の多義動詞「とる」と中国語の多義動詞「取（qu）」を例に複数の意味・概念をひとつの包括概念に取りまとめたコア理論の知見を示した。

2.3. 先行研究の問題点

以上で概観したように、従来から、多義語の意味と習得に関する先行研究は多くなされている。様々な観点から「切る」の意味・機能、意味展開のメカニズムおよび学習者の多義語習得の状況を考察してきた。ただ、意味記述と意味分類では、解明されていない点が残っている。「切る」の核となる概念および「切る」の動作主、被動作主、力の作用方式に関する制約は十分に検討されていない。全体的な意味の広がりを見野に入れた意味記述を追求するため、新たな意味体系を構築する必要がある。また、認知言語学からの考察は主に研究者の少数例による内省的なものであり、質的分析の上で、統計的なアプローチから検証する研究は必ずしも多くない。認知理論に基づいた意味分析は量的な観点から裏付けられるか、学習者は母語話者のもつカテゴリ構造とどう異なるかはまだ検討の余地が残されている。次節からはこれらの課題を解決するための理論的枠組みを説明する。

3. 理論的枠組み

3.1. 力動性

山梨（2000）は言語の形式と意味は、外部世界の知覚、経験を基盤とする様々なイメージ・スキーマによって動機づけられていると指摘した。また、図1のように、言語の概念体系の形成は、普遍的な「身体的基盤」と固有的な「社会・文化的視点」に関わり、具体的経験領域、イメージ、イメージ・スキーマという三つの段階を経て、抽象度が上がると述べた。「切る」という動詞の背景には、力という要素が無視できないため、力のスキーマに関する重要な認知理論のひとつを紹介する。

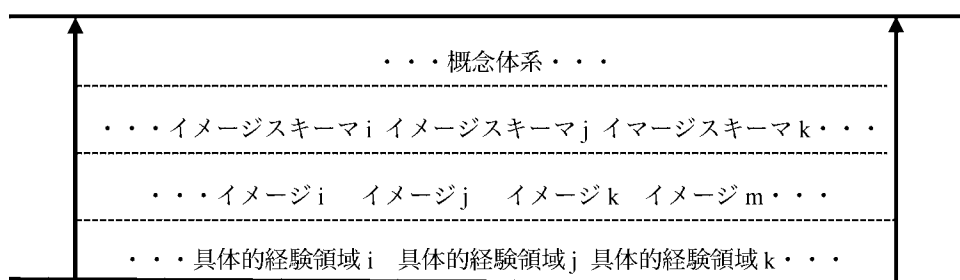


図1 概念体系の普遍性と固有性 (山梨 2000: 157)

Talmy (1985) では、力動性 (Force Dynamics) という認知理論を提唱している。力動性とは、力という観点から見た個体の相互作用のことである (松本 2003: 60)。力の構造においては、二つの対立した力の参加者の力のバランス (強・弱) によって相互作用の結果状態が異なると捉えている。この力構造の中で、本来的に活動や静止の傾向をもつ存在は主動体 (agonist) と呼ばれ、主動体に対抗する力を加える存在は対抗体 (antagonist) と呼ばれる。図2で力動性の図式を示す。図式aと図式bは力動性の基本的な通常状態のパターンとして挙げられる。例文(1)を参照されたい。目的語項 (1a) の「空気」、(1b) の「丸太」である主動体は活動・静止の傾向を持つが、主語項 (1a) の「扇風機」、(1b) の「留め金」である対抗体から継続的に強い力を加えられると、力が行使された期間中に本来の内在傾向性と逆の傾向が生じた状態にある。すなわち、このような事象では、使役と使役の結果が同時に生じ、拡張使役 (extent causation) と呼ばれる。一方、図式cと図式dのように対抗体 (1c) の「ピストン」、(1d) の「遮断バルブ」から主動体 (1c) の「油」、(1d) の「ガソリン」に力を行使しない状況から力を加える状況になることを通し、力が行使された期間中に主動体の状態変化が見られる事象がある。このような使役における変化のプロセスが見られた事象は開始時使役 (onset causation) と呼ばれる。

Talmy (2000) によると、分断・破壊を表す事象は、対象の状態変化を含み、その変化の原因・様態と変化のプロセスとして構成される。それゆえ、「切る」が表す事象は開始時使役のパターン (図式c, d) にあてはまると言える。そこで、開始時使役のパターンの力構造に基づき、「切る」の核となる概念と意味・機能を考察する。

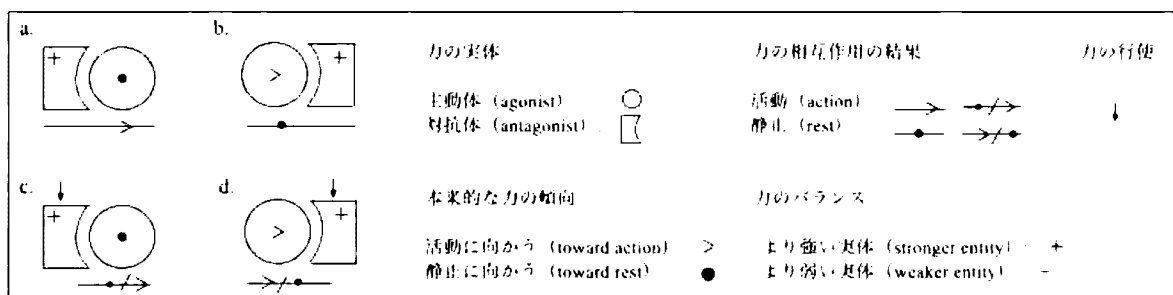


図2 力動性のパターンの図式

- (1) a. The fan kept the air moving.
(扇風機が空気を動かし続けた)
- b. The brace kept the logs from rolling down.
(留め金が丸太が転がり落ちるのを防いだ)
- c. The piston made the oil flow from the tank.
(ピストンが油をタンクから流れ出させた)
- d. The shutoff valve stopped the gas from flowing out.
(遮断バルブがガソリンが流れ出すのを止めた)

(松本 2003: 60-65)

3.2. 概念メタファー

Lakoff & Johnson (1980) によると、メタファーはレトリックの言語表現だけではなく、人間の思考や行動などの日常の営みのあらゆるところに浸透しており、概念体系の大部分がメタファーによって成り立ち、日常の活動の仕方に構造を与えている。概念メタファー (Conceptual Metaphor) は具体的なメタファー表現と区別され、2つの概念領域間の構造的な対応関係に関わる。すなわち、抽象的なドメインを具体的なドメインで理解する認知的な仕組みにあてはまる概念レベルのメタファーは概念メタファーと呼ばれ、その概念メタファーを言語的に具体化したものはメタファー表現と呼ばれる。

Lakoff et al. の MetaNet team (2012-) により作成された概念メタファーのデータベース MetaNet Metaphor¹ によると、< CAUSES ARE FORCES > と < IMPEDIMENTS TO ACTION ARE ANTAGONISTIC FORCES > という概念メタファーが存在する。本研究はこれらのメタファーに従い、「切る」に関する事象において、< 行為は力 > という概念メタファーを提起し、< 先行する行為・既存する状態は主動体による力 > と < 行為に関する妨害・状態に対する破壊は対抗体による力 > をその概念メタファーのサブメタファーとして位置付ける。

4. リサーチデザイン

4.1. 目的と研究設問

先行研究と残されていた課題を踏まえ、本研究の目的は、日本語の多義動詞「切る」の各語義と意味構造を分析することで、「切る」の核となる概念と意味構造、目的語項と主語項および力の作用方式に関する制約、各意味間のつながりを解明すること、また、その認知理論に基づく意味分析の妥当性を心理実験によって検証し、学習者と母語話者における意味構造の違いを明らかにする点にある。そのため、本研究は以下の三つの課題を設定した。

¹ データベースの最終修正日は2016年8月7日である。

- RQ1 「切る」の核となる包括的概念と意味構造はどのようなになるのか。
- RQ2 意味分析の結果と心理実験による結果に違いがあるのか。
- RQ3 中国人日本語学習者と日本語母語話者の持つ「切る」の意味構造に違いがあるのか。

4.2. データ

4.2.1. 意味分析用のコーパスデータ

田中（1990）はコア理論を提唱している。コア理論に基づくことばの意味空間は、図3に示すように、様々なレベルの概念が集積している立体構造とみなされている。この意味空間において、多義語の複数の用法のそれぞれの意味・概念を一つに取りまとめた包括概念は「コア」であり（松田・黄 2011:44），Langacker（1987）によるスーパー・スキーマと一致する。本研究は，現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）に基づき，各辞書や各種の先行研究で言及された意味分類基準と語義項目を幅広く取り込み，表1のように，意味空間の概念レベル1にあてはまる「切る」の用例を抽出し，中心義を含み15個の語義として整理した。これらの用例を使用し，意味分析でそれぞれの語義に関する意味記述の詳細を説明し，意味分類とカテゴリー化を行った。

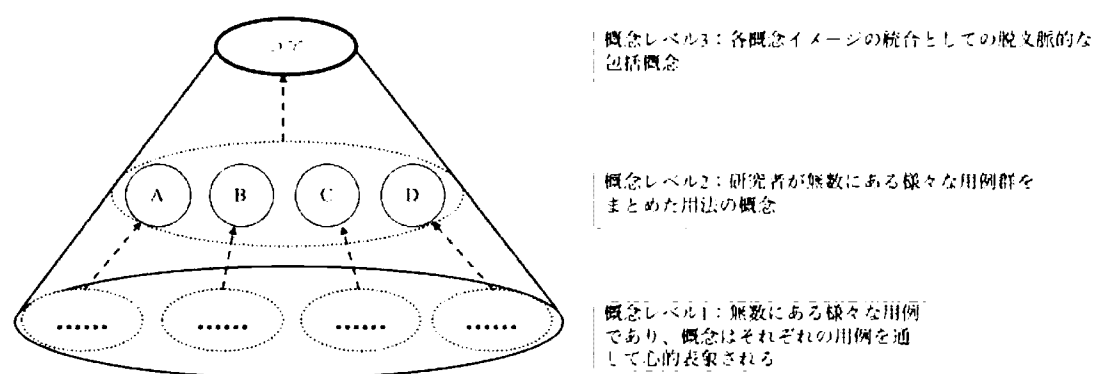


図3 コア理論に基づく意味空間（松田・黄 2011: 44）

表1 「切る」の意味空間における用例

語義	コーパスデータ
0. 分断義	(2) 熱湯に包丁をつけ，かるく水気を取ってから，一気に [ケーキ] ² を切る。
1. 開封義	(3) ホテルの部屋に帰って，車のなかで渡された [封筒の封] を切ると，なかから金字を刻印したダーク・ブルーの東独のパスポートが出てきた。
2. 切除義	(4) H2 ブロッカーの潰瘍治癒率は，八十％と効率で，潰瘍で [胃] を切る人が激減したことが確かです。
3. 切取義	(5) 依頼主に [領収書] を切る時は，印刷代+デザイン料・雑費を含めた金額を書いたらいいのでしょうか。

² 「切る」の目的語項を全て [] によって表記する。複合動詞の前項動詞を目的語項と同等に扱う。

4. 殺傷義	(6) 高橋与惣右衛門は敵兩人と切結び、猪太夫の眼前に於いて「敵一人」を切る。
5. 創造義	(7) そこで床を高くして床面に「炉」を切ること、つまり高床式住居にすることを考案した。
6. 混合義	(8) こんな遊びを日本でもやるのかなと彼は言いながら、「トランプ」を切ってテーブルに伏せて置き、上から一枚とって、表を見せた。
7. 取捨義	(9) 豆腐はキッチンペーパーに包み、電子レンジで三十秒加熱して「水気」を切る。
8. 中断義	(10) 就寝時や外出時には「電気」を切る。
9. 批判義	(11) 流麗な文章で、痛烈に当時の「世相」を切っていた。
10. 横断義	(12) 今は南からの黒潮に乗ってスナメリたちが「波」を切る。
11. 回転義	(13) バスが急な「ハンドル」を切るたびに、私の体は激しく左右に引張られた。
12. 突破義	(14) ようやく、と言ったが、パイプウの抜き撃ちは平均で「コンマ一秒」を切る。 (15) 日本語能力試験まで残り「一ヶ月」を切りました。
13. 完遂義	(16) みんなで声を出し合い、最後まで全力で「走り」切ると抱負を力強く話しました。
14. 極度義	(17) 「疲れ」切るまで暗い海を泳いで、それで神さまのところへ行けるならいいじゃないのって、自分に言い聞かせたわ。

4.2.2. 心理実験のデータ

心理実験では、日本語母語話者と中国人日本語学習者各30人を対象にカード分類法による類似性判断テストを行い、「切る」の語義各2つの用例で類似性判断テストのカードリストを作成した（表2を参照）。意味分析との一致性を高めるため、各語義の用例aは意味分析で用いた用例を使用した。ただし、テストの難易度と時間も実験の精度に影響を与えるため、被験者の負担にならないように、動詞の目的語項に重点に置き、用例のコロケーションのみを使った。

表2 類似性判断テストのカードリスト

語義	用例	中国語訳
0. 分断義	a. ケーキを切る。	切
	b. 紙を切る。	剪
1. 開封義	a. 封筒の封を切る。	打开, 剪开
	b. 袋を切る。	打开
2. 切除義	a. 胃を切る。	切除
	b. 爪を切る。	剪
3. 切取義	a. 領収書を切る。	发行
	b. 小切手を切る。	发行
4. 殺傷義	a. 敵を切る。	杀
	b. 手を切った。	切 (到)
5. 創造義	a. 囲炉裏を切る。	修筑
	b. 型紙を切る。	剪出
6. 混合義	a. トランプを切る。	洗
	b. 麻雀を切る。	洗

7. 取捨義	a. 野菜の水気を切る。	去除, 甩干
	b. 部門を切る。	去除
8. 中断義	a. 電気を切る。	关
	b. 縁を切る。	断绝
9. 批判義	a. 世相を切る。	批判
	b. 政治を切る。	批判
10. 横断義	a. 波を切る。	冲破
	b. 雲を切って飛ぶ。	划破
11. 回転義	a. ハンドルを切る。	使...转弯
	b. 球を切る。	使...转弯
12. 突破義	a. 100メートル走で10秒を切った。	打破
	b. 一ヶ月を切る。	低于
13. 完遂義	a. マラソン大会で最後まで走り切る。	V1+完
	b. 本を読み切った。	V1+完
14. 極度義	a. 彼は心身ともに疲れ切った。	V1+極 (了)
	b. 部屋は冷え切った。	V1+極 (了)

4.3. 分析手順

BCCWJ コーパスデータから抽出した用例を使用し、力動性の力構造に基づき、「切る」の各語義に関する意味分類を行い、語義間の有契性と共通した包括概念（スーパー・スキーマ³）を探った（RQ1）。意味分析の妥当性を量的な観点から検証するため、質的分析に加え、日本語母語話者と中国人学習者各 30 人を被験者とし、それぞれのグループに心理実験を行った。上記の「切る」に関する用例が書いてあるカードを提示し、「切る」の意味が似ているものをグループ（グループの数、および各グループ内のカードの数は自由とした）に分けるように指示することで類似性判断テストを行った。得られた結果で R によるクラスター分析を行った。その後、意味分析による意味構造が心理実験の結果と一致しないところを再検討し（RQ2）、母語話者と学習者のカテゴリー構造では違いがどのようになるかを考察した（RQ3）。

5. 結果と考察

5.1. 意味分析の結果

5.1.1. 力動性による再分類

多義語は複数の語義を持ち、文字通りの具体的な語義が中心となり、そこから意味拡張が起こる。この中心義には、①文字通りの意義であること、②具象的な意義であること、③なるべく他の多くの意義の前提になることという 3 つの判断基準がある（瀬戸他 2017: 74）。この基準に従い、本研究は特に動詞とその目的語項のコロケーションに注目するのに加え、「切る」の力の作用方式も考慮するため、先行研究と少し異なった「[鋭利な刃物などの道具] で・[集中した力]

³ 用語を統一するため、本論文は包括的概念を表すとき、「スーパー・スキーマ」を採用する。

で・「一続きもの」を分断する」を「切る」の中心義に据える。また、「切る」の対象が本来的にある特定の状態にあるために、一種の内在傾向性が捉えられる。それゆえ、「切る」の目的語項を主動体とし、目的語項に動作の影響を与える主語項を対抗体としている。このような力動性の力構造に基づき、主動体の状態変化に着目し、コーパスデータから整理された表 1 の 15 個の語義を以下の 4 つの意味パターンに分類した。

【パターン 1 外在連続性】：力によって外在連続性を破壊し移動する。

「外在連続性」とは、「切る」の対象は外在的に一続きになっている性質を持ち、安定した状態にあり、ある機能を果たすに足る「全体」としてのまとまり、統合性を持っていることである。一旦その外在連続性を破壊すると、対象の外観に加え、状態と機能にも変化が生じる。特に本来の機能が喪失されるのがそのパターンの特徴である。例えば、(18) のように全体に相当する「ケーキ」を幾つかの部分に分けることで、「ケーキ」の本来の連続体としての状態を失い、機能もある程度変わるようになる。最後に全体の安定した静止状態から各部分が自由に移動できる状態になる。しかし、(19) の「泥」と「砂糖」は同様に分断動作を行っても、分離された対象はまだつながっている全体として「泥」と「砂糖」と認識でき、ただ分断された前の量と比べ少なくなるだけである。外在状態と機能にもほぼ変化が生じていないため、「切る」と共起できない。

- (18) 熱湯に包丁をつけ、かるく水気を取ってから、一気に[ケーキ]を切る。(表 2-(2)再掲)
(19) *[泥]を切る。/*[砂糖]を切る。(作例)

また、(20)、(21)、(22)、(23)、(24)では、「切る」の意味はプロトタイプである<分断義>と異なり、分断動作+ α になる。これらの拡張義では、プロトタイプの分断動作に加え、開ける(開封義)、除去する(切除義)、利用する(切取義)、殺傷する(殺傷義)、創造する(創造義)ことなどの後続する出来事があるため、中心義からメトニミーによって拡張される。また、封は手紙の一部分であり、患部となる胃は人間の身体部位であり、発行された領収書は全体から取られた一部分であるように、「切る」の対象はあるもの全体の部分であるとみなされるため、本来にある外在連続性(部分と全体の連続性)が捉えられる。その外在連続性により、対象に含まれた安定した静止する傾向にある性質がプロトタイプの<分断義>と共通するため、同様に外在連続性のパターンに分類した。図 4 でパターン 1 の力動性の構造を示す。

- (20) ホテルの部屋に帰って、車のなかで渡された[封筒の封]を切ると、なかから金字を刻印したダーク・ブルーの東独のパスポートが出てきた。(表 2-(3)再掲)
(21) H2 ブロッカーの潰瘍治癒率は、八十%と効率で、潰瘍で[胃]を切る人が激減したことが確かです。(表 2-(4)再掲)
(22) 依頼主に[領収書]を切る時は、印刷代+デザイン料・雑費を含めた金額を書いたらいいのでしょうか。(表 2-(5)再掲)

(23) 高橋与惣右衛門は敵兩人と切結び、猪太夫の眼前に於いて〔敵一人〕を切る。

(表 2-(6)再掲)

(24) そこで床を高くして床面に〔炉〕を切ること、つまり高床式住居にすることを考案した。

(表 2-(7)再掲)

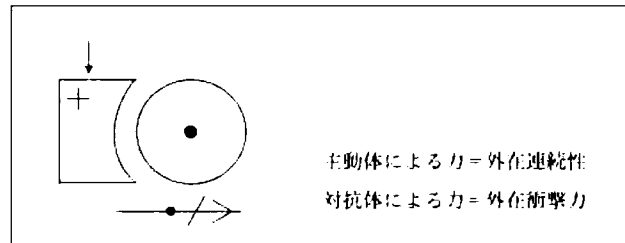


図4 外在連続性の力構造パターン

【パターン2 内在秩序性】：力によって内在秩序性を破壊し移動する。

「内在秩序性」とは、「切る」の対象には、外在的に見えない体系性や秩序性がある一面が存在することである。(25)の「トランプ」は本質的に紙であるが、「紙を切る」のようなプロトタイプの＜分断義＞と異なり、実際に分断動作を伴わず、対象の外在連続性を破壊することは含意しない。そのため、＜混合義＞の対象は＜分断義＞の対象のように一続きものに見立てられるが、主動体の内在傾向性の体现の仕方が異なる。トランプの用途と機能を考えると、実際にトランプは普通の紙ではなく、人間が意図的に数値やマークなどを付け、体系を設けるカードである。そのため、トランプには一種の内在秩序性が存在している。その内在秩序性により、トランプは本来的に静止する傾向にあると捉えられ、対抗体からの力でその安定した秩序性を壊すことによって、対象が混沌とした活動状態になるという状態変化が想定できる。

(25) こんな遊びを日本でもやるのかなと彼は言いながら、〔トランプ〕を切ってテーブルに伏せて置き、上から一枚とって、表を見せた。

(表 2-(8)再掲)

また、(26)のように、「切る」の対象「水気」は上記用例の対象である固体と異なり、明らかに液体であるが、「切る」と共起できる。この語義は、分断するように対象に「分離させる動作を行った→対象が本来の物体内から分離された→分離された対象を取り去った」という連続的なスクリプトを表し、分離動作が実行された後の取捨が問題となるため、＜取捨義＞と名付ける。一方、(27)の対象「電気」は物理的なものというより、目に見えずかなり抽象的なものである。状態が連続していて、ある機能を果たすものを分断することを通しその機能を中断する事象を表す。その物理的なものを対象とする＜取捨義＞と、より抽象的なものを対象とする＜中断義＞は共に、(21)「胃を切る」のような＜切除義＞から、実際に患部を切るように、不要なものをはらい捨てる意味を含意し、メタファーによって展開されると考えている。また、(28)の「世相」

は同様に抽象的なものであるが、表された事象と拡張経路が＜中断義＞と異なり、刃物で人間の肉体に傷害を与える＜殺傷義＞から、鋭利な言葉や文章などで対象に抽象的な傷害を与える＜批判義＞に拡張する。それゆえ、これらの語義は、パターン1の中心義からのメトニミー拡張群と比べ、プロトタイプからより遠く離れている。

また、液体と抽象的なものはともにパターン1で述べた外在連続性が捉えにくい状態にある。(26)の水気は野菜の内部に含まれた成分であり、(27)の電源と(28)の「世相」自体には一定の体系や組織で構成され、安定した秩序性を構成するとみなすことが可能である。そのため、＜混合義＞と同様に、主動体の内在傾向性が内在秩序性で示される。これらの語義は同様にパターン2の内在秩序性にあてはまるが、さらに状態変化の経路の側面から考えると、語義の間に微妙な差異が存在する。他の語義における＜静止→活動＞という形の状態変化と違い、＜中断義＞の対象である電流や人間関係などは、内部組織が互に行き交う形で特定の機能を実現するため、本来的に静止状態ではなく、流動する傾向にあると捉えられる。その流動的な電流や人間関係などに対抗体からの強い阻止力を適用すると、主動体が活動状態から静止状態に変化する。それゆえ、＜中断義＞はパターン2において、より周辺的な位置を占める。パターン2の力構造を以下の図5に示す。

- (26) 豆腐はキッチンペーパーに包み、電子レンジで三十秒加熱して「水気」を切る。 (表 2-(9)再掲)
- (27) 就寝時や外出時には「電気」を切る。 (表 2-(10)再掲)
- (28) 流麗な文章で、痛烈に当時の「世相」をきっていた。 (表 2-(11)再掲)

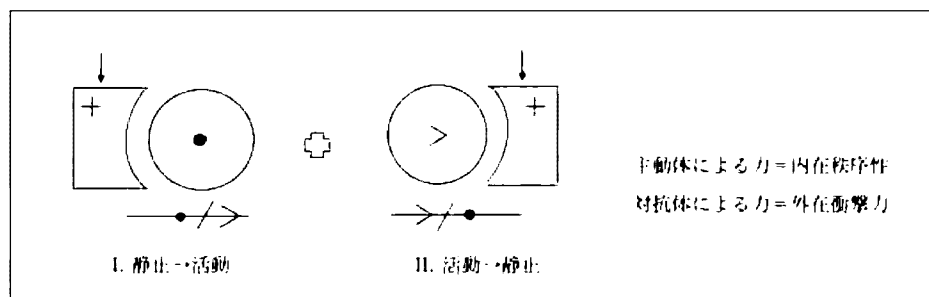


図5 内在秩序性の力構造パターン

【パターン3 物理抵抗性】：力によって物理抵抗性を克服し移動する。

「物理抵抗性」とは、「切る」の対象には動作への抵抗力が存在することである。(30)と(31)の「波」や「雲」は(19)の「泥」と「砂糖」などと同様に、分断してもその外在的な性質を壊さず、外在連続性が捉えにくい、「切る」との共起が容認される。一般的に、その＜横断義＞は中心義からメタファーによる展開で説明されるが、メタファーのみで解釈すると、「??水を

切る」と「波を切る」, 「?空気を切る」と「雲を切る」の容認度の違いは解釈しにくくなってしまう。したがって, 「切る」の対象が液体と気体である場合, 対象の性質に関する何らかの制限があると想定できる。液体や気体の物質は固体とは異なり, 自由に流動できるため, 密度がある程度濃い場合, 対象自体には物理的な抵抗力が見られる。すなわち, 「波」や「雲」などには濃い密度があるため, 外からの力に対し, ある物理抵抗性が存在している。より集中的な強い力を対象に加え, 主動体である「波」や「雲」が静止状態から活動状態に変わる。そのため, 「波」, 「雲」, 「霧」などは許容されるが, 濃い密度が含意されない(すなわち, 主動体による力が捉えにくい)水や空気などは特定の文脈がないと, 「切る」と共起しにくいと想定できる。

一方, (32)のように, 文脈によって「空を切る」は容認される場合は実際に少なくない。これらの例文では, ある勢いとスピード感を伴っている点で共通している。力の強さの側面から考えると, ゆっくり分断動作を行うことと比べ, 勢いとスピード感は道具である鋭利な刃物と同様に動作の手段と様態を表し, 力の強さと衝撃を際立たせる。前述の通り, パターン3における「切る」の対象はある物理抵抗性を持っている。その抵抗力が存在するからこそ, 分断目的を実現するための対抗体からの力は普通の力ではなく, 主動体のもつ抵抗力ほどの集中された力を行使する必要がある。そのため, 「空気」に関する用例に含意された勢いとスピード感は同様に, 「切る」の対象が通常ある程度の抵抗力を持つことを裏付けることができる。

- (29) ?? [水] を切る。 / ? [空気] を切る。 (作例)
- (30) 今は南からの黒潮に乗ってスナメリたちが [波] を切る。 (表 2-(12)再掲)
- (31) と同時に稲妻が鋭く [雲] を切ってはしった。 (BCCWJ)
- (32) シュンっと [空] を切る音を立てて小石は飛び, 見事, 物の怪の後頭部に命中した。 (BCCWJ)

また, 進行方向を変えたり, 回転を与えたりする<回転義>は<横断義>の力関係と類似する。物体は同じ速度と方向を保ち続けようとする物理的な慣性を持つため, 外力の作用に対し, 物理的抵抗力があると想定できる。そのため, (33) のハンドルに加え, 運転中の舵, 球などは「切る」との共起が許容される。同じ速度や方向で運転するのは相対静止の状態にあたり, 連続的な強い力によって相対静止の状態から活動した状態になると捉えられる。また, <横断義>と<回転義>の間に, 「気体を勢いよく「切る」のような動作を加える→回転を与えたり進行方向を変えたりする」という連続的なスクリプトが想定できる。すなわち, 「横断義」の「空気を勢いよく押し分ける」というプロセスで「回転義」の「回転を与えたり, 進行方向を変えたりする」という結果を表し, メトニミーによる展開というパターン3内の語義間のつながりが捉えられる。図6でパターン3の力構造を示す。

- (33) バスが急 [ハンドル] を切るたびに, 私の体は激しく左右に引張られた。 (表 2-(13)再掲)

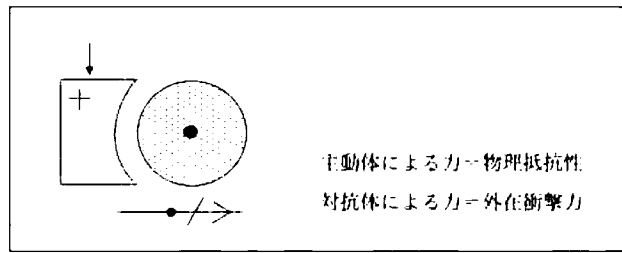


図6 物理抵抗性の力構造パターン

【パターン4 心理傾向性】：力によって心理傾向性を突破・違反し移動する。

「心理傾向性」では、人間が心理的に、行為の達成に対して強い抵抗力を持つと認識・予想する事柄が「切る」の対象となることを表す。このパターンには、二つの下位分類が存在している。タイプ1は事柄の達成を人間が期待しているが、意識的にこれに達成するのはあまり簡単ではなく、何らかの困難を伴うと認識する心理的傾向性が存在するものである。それに対し、タイプ2はその事柄達成を人間が期待していないものである。

(34)のように、「切る」の対象が数値である場合、基準値より下回るという意味を表している。数値が時間とともに起点から継続的に減少するとき、その減少経路がグラフ上で基準値を示す線を切って測定値になる。(30)の対抗体「スナメリ」が主動体「波」を切るように前方に進むことと移動様態で類似しており、＜横断義＞からメタファーの展開であると捉えられている。しかし、「数値を切る」は対象の基準値より下回るという意味のみではなく、人間の心理的傾向性が含意されている。例えば、(34)の用例には、「100メートル走で9秒99」の成果を達成する前に、「10秒」という壁を人間が意識している。したがって、「10秒を切った」は「10秒を下回った」と比べ、行為を実現したとき、目的達成というプラスのニュアンスを伴う。また、この＜突破義＞を表す場合、(35)の「ようやく」などの副詞と共に起する用例も多い。すなわち、「切る」の対象には、達成しようとする行為に何らかの妨害が存在し、その妨害はパターン3における物理的な妨害ではなく、人間が心理上・認識上に予想した妨害である。

一方、(36)「時間を切る」が表す事柄は人間にとって望ましくない心理的傾向性が見られる。この事象には、動詞句に表された事柄が起きてほしいが、起きにくいと思うというような心的葛藤が存在せず、心理的な側面は単純であるため、タイプ2のほうに合致している。その心理傾向性は「期限が切れる」という事象に対する抵抗性と理解できるので、事象達成と事象達成への心理的妨害という対立関係が捉えられる。このような心理的妨害は複合動詞の意味にも見られるため、本動詞と複合動詞の語義間のつながりも窺わせる。以下この側面から本動詞と複合動詞の有契性を見ていく。

(34) 100メートル走で[10秒]を切った。(作例)

(35) ようやく、と言ったが、パイフウの抜き撃ちは平均で[コンマー秒]を切る。

(表2-(14)再掲)

(36) 日本語能力試験まで残り「一ヶ月」を切りました。 (表 2-(15)再掲)

「切る」は複合動詞である場合、語彙的複合動詞と統語的複合動詞、両方とも存在している。語彙的複合動詞の場合はほぼ本動詞「切る」の中心義と同様であり、分断・終結の意味を表している(姫野 1999)。接辞的に統語的複合動詞として用いられる場合は前項動詞の性質によって、大まかに二つのグループに分けられる。前項動詞が継続動詞の場合、行為を完遂することを表すのに対し、前項動詞が瞬間動詞である場合、極度の状態に達することを表している⁴。(37)のように、＜完遂義＞では前項動詞が表す事象の完成は期待されるが、一瞬で簡単に目的を達成する事象ではなく、人間がそれを達成するまで、恐らく長い時間がかかり、または途中で困難や苦痛を伴うと認識する事象である。そのため、タイプ1にあてはまる。一方、＜極度義＞は(38)「疲れ切る」のように、前項動詞「疲れ」が表す事象は人間にとって明らかに望ましくないという心理的傾向性が見られる。タイプ2に該当する場合が多い。図7でパターン4の力構造を示す。

(37) みんなで声を出し合い、最後まで全力で「走り」切ると抱負を力強く話しました。 (表 2-(16)再掲)

(38) 「疲れ」切るまで暗い海を泳いで、それで神さまのところへ行けるならいいじゃないのって、自分に言い聞かせたわ。 (表 2-(17)再掲)

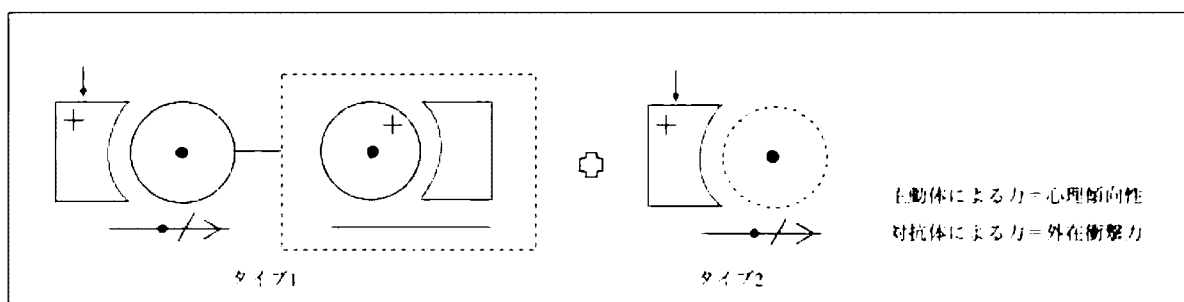


図7 心理傾向性の力構造パターン

5.1.2 「切る」のスーパー・スキーマ

5.1.1 節で力動性の構造に基づき「切る」の語義を4つの意味パターンに分類した。より詳細で背景化したものを考えると、パターン1の外在連続性とパターン2の内在秩序性には対象の安定した状態(主動体)とその状態への破壊(対抗体)が、パターン3の物理抵抗性とパターン4の心理傾向性には行為(対抗体)と行為への妨害(主動体)という対立関係が捉えられる。また、意味記述が示すように、いずれの意味パターンからも、力によって対象に含まれた内在傾向性を

⁴ 継続動詞が＜極度義＞であり、瞬間動詞が＜完遂義＞を表す場合も存在する(姫野 1999)が、本研究は主に典型的な場合を論じる。

何らかの形で破壊することを通し、対象の状態を変えるという共通の事象が抽出できる。力動性の構造を踏まえ具体的に言えば、力による使役移動（静止→活動）という状態変化を表す場合が多い。それゆえ、「切る」のスーパー・スキーマを「力による使役移動という状態変化」とする。

5.1.3 「切る」の意味構造

以上の考察により、力動性に基づく「切る」の4つの意味パターンと語義間の関連性を整理すると、図8のような意味構造になっている。

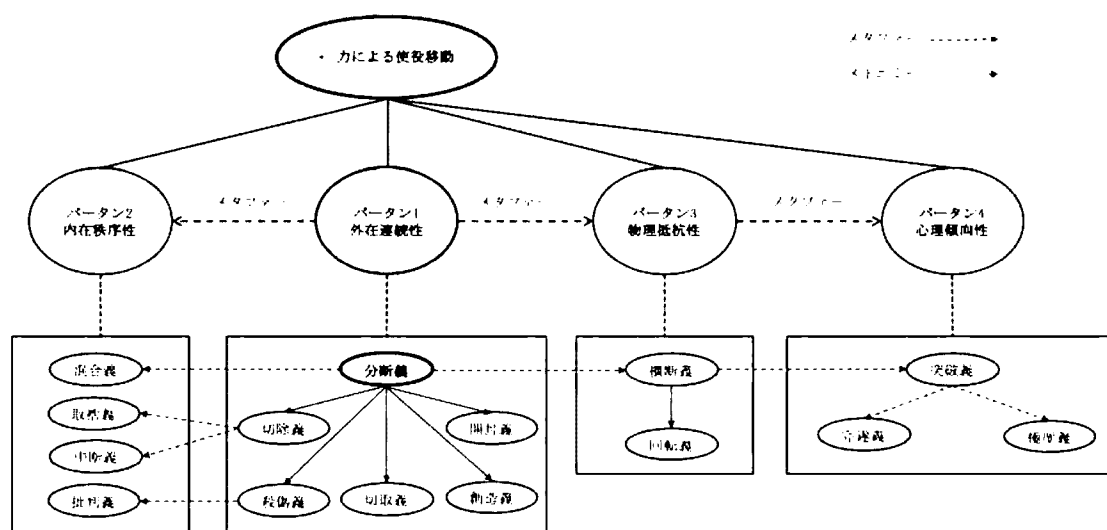


図8 「切る」の意味構造⁵（意味分析の結果を基に）

5.2. 心理実験の結果

心理実験では、母語話者と被験者それぞれのグループに類似性判断テストを行い、クラスター分析を行った。結果は図9と図10のようになった。

5.2.1. 母語話者の結果

母語話者の結果では、最長の定常状態の箇所にカッティングポイントを置くと、15個の「切る」の語義を含む30個の例文は大きく2群に分かれた。群内のコロケーションの内容を考察すると、左側の群は袋、紙、ケーキ、封、領収書、小切手、胃、爪などの目的語項を含むため、プロトタイプの概念である分断動作に近づいた語義のクラスターである。すなわち、中心義と中心義からのメトニミー拡張群である。右側の群は部門、麻雀、トランプ、世相、政治、水気、縁などの目的語項を含むため、中心義からより離れた拡張義のクラスターである。

さらに、2群の内部構造を分析すると、左側の群では、2つの下位であるクラスター（図9のI

⁵ 全体的な中心義と中心的な意味パターン＜外在連続性＞およびスーパー・スキーマを太線で示す。

とⅡを参照)が形成された。クラスターⅠは<分断義>、<開封義>、<切除義>、<切取義>、<殺傷義>のコロケーションを含み、<創造義>を除いた意味分析のパターン1の外在連続性と対応する。<創造義>のコロケーションは独立したクラスターⅡになった。「切る」の対象「囲炉裏」,「型紙」は本来にあるもの全体の部分である点に着目するため、<創造義>が外在連続性のパターンに分類された意味分析の結果とずれていた。動詞と目的語項の関係から考えると、(17)「ケーキを切る」の対象「ケーキ」が分断動作の対象であるのと異なり、「型紙」は分断動作の直接的な対象ではなく、直接的な対象の「紙」を分断して得られた結果である。すなわち、<創造義>では動作の結果が焦点化され、動作の対象が言語化されない。このため、<創造義>を他の語義と区別し、別途に考察する必要がある。また、Levin (1993)によると、john cut | a pattern out of paper / a slice of cake / a key |のように、「切る」の<創造義>は英語の cut にも存在している。しかし、このような意味用法は中国語の分断動作に見られない。

そして、右側の群では、3つのクラスター(図9のⅢ,Ⅳ,Ⅴを参照)が形成され、それぞれ意味分析におけるパターン2の内在秩序性、パターン3の物理抵抗性、パターン4の心理傾向性と一致している。このため、母語話者のクラスター分析の結果は力動性理論に基づいた意味分析の妥当性のある程度検証できると言える。

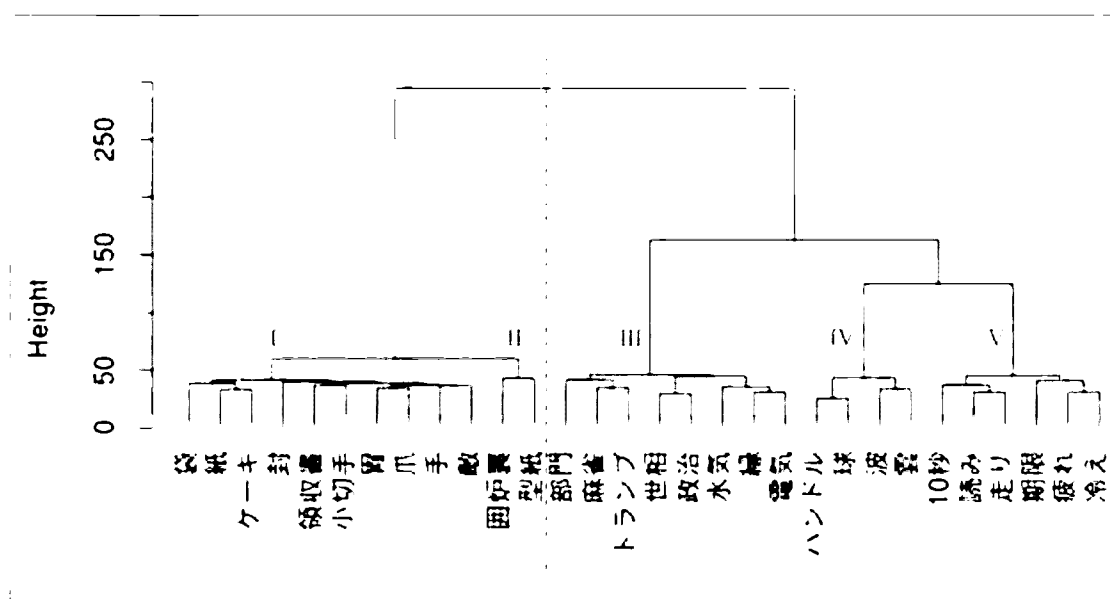


図9 JNSにおける「切る」の意味のカテゴリー化

5.2.2. 中国人学習者の結果

学習者の結果では、最長の定常状態の箇所にカッティングポイントを置くと、母語話者と同様に大きく中心義に近づいたクラスターと中心義に相対的に離れた拡張義を含むクラスターの2群に分かれた。

しかし、さらに2群の内部構造を分析すると、母語話者のカテゴリー化との差が見られる。ま

ず、左側の群では、＜創造義＞は独立したクラスターにならない点で母語話者の結果と一致していない。中国語の分断動詞においては、動作結果に焦点を当てた意味用法が存在しないため、中国人学習者はこの語義を十分に認識していないことがひとつの原因であると考えられる。右側の群では、母語話者の意味分析のパターンと一致していた3つのクラスターは、学習者の場合では同様なパターンは見られず、大きく2つの下位であるクラスター（図10のクラスターIIとIIIを参照）が形成された。クラスターIIは「切る」の複合動詞の語義を含む。複合動詞の語義が本動詞からの意味拡張経路を捉えにくくなり、本動詞と複合動詞の意味のつながりを意識していないため、学習者の方は多義語の本動詞の語義と複合動詞の語義を分けて認識する傾向が見られた。このため、複合動詞が独立したクラスターになった。クラスターIIIは部門、期限、縁、電気、政治、世相、カーブなどの抽象的なものを含むが、球、波、トランプ、麻雀、雲などの具象的なものも見られる。また、「切る」のような分断動作と類似する動作を行う語義とそうでない語義両方とも含んでいる。全般的な意味分類が少し混乱し、カテゴリー化していない傾向が示された。このクラスターの分類基準は明らかになっていない。

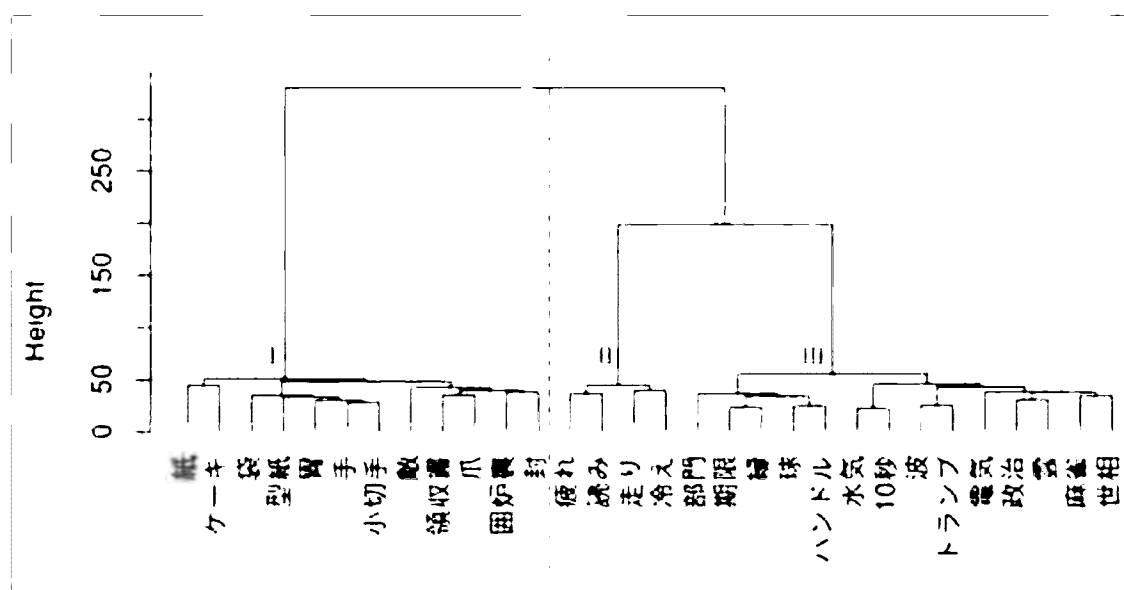


図10 CJLにおける「切る」の意味のカテゴリー化

6. まとめ

6.1. 得られた知見

本研究では、BCCWJ コーパスから抽出した用例で「切る」の意味のカテゴリー化に力動性に基づいた質的分析と心理実験による量的分析を行った。以下提示したりサーチクエスションの順に従い、得られた知見をまとめる。

まず、RQ1（包括的概念と意味構造）に関しては、力構造により「切る」の包括的概念である

スキーマは「力による使役移動という状態変化」である。また、そのスキーマの言語環境によるバリエーションとして、【パターン1 外在連続性】，【パターン2 内在秩序性】，【パターン3 物理抵抗性】，【パターン4 心理傾向性】という4つの意味パターンを立てた。その中に、中心義を含む外在連続性のパターンを4つの意味パターンの中心に据えた。語義間のつながりとして、従来の先行研究が示唆するメタファーやメトニミーなどの動機づけに加え、力構造の要素のパラメータを導入し、＜力動性+メタファー・メトニミー＞の形で関連づけた。図8に意味分析の結果に基づいた「切る」の意味構造を示した。

次に、RQ2（意味分析と心理実験による結果の差）に関しては、図9の母語話者のクラスター分析の結果が示すように、意味分析と心理実験の結果の間に、一致しないところも見られるが、心理実験における母語話者の結果では、力動性に基づいた4つの意味パターンのカテゴリー化と同様の傾向が見られた。そのため、力動性に基づいた意味分析の結果は統計的な手法である程度検証できる。意味分析と心理実験の結果を総合的にまとめた結果が図11のような意味構造である⁶。

最後に、RQ3（母語話者と学習者における意味構造の差）に関しては、図9と図10のカテゴリー化の結果を比較すると、母語話者と学習者のもつ「切る」の意味構造には違いが存在することが明らかにされた。学習者は具体的な分断動作を伴う語義が中心的語義群になったという点で一致しているが、下位のクラスターでは差が見られた。全般的に、母語話者のカテゴリー構造では、5つのクラスターが形成されたのに対し、学習者の方は3つのクラスターが形成され、カテゴリー化の基準が明らかにならなかった。

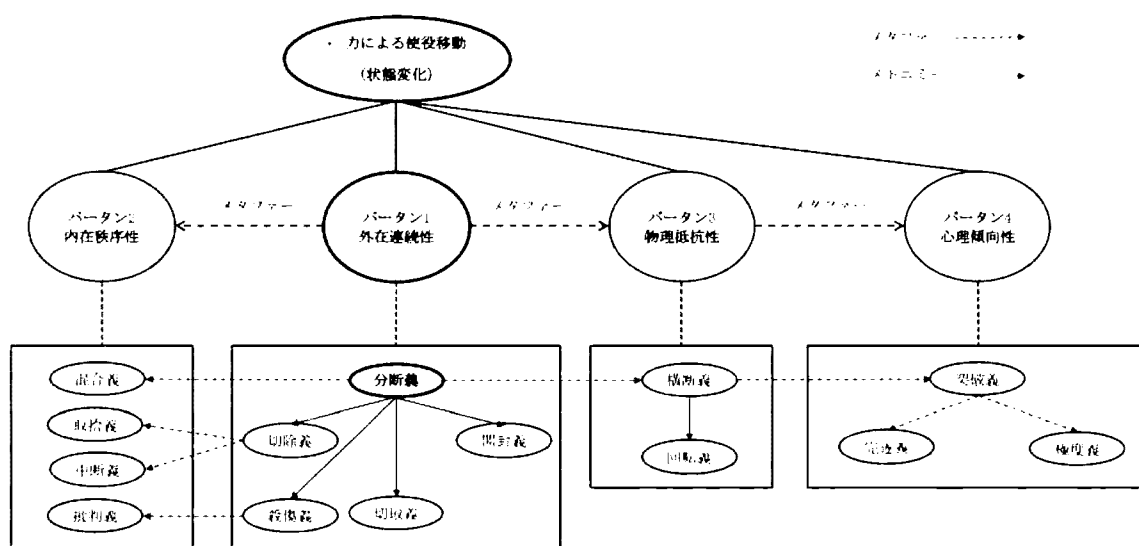


図11 「切る」の意味構造（意味分析と心理実験の結果を基に）

⁶ ＜創造義＞をどのようにこのカテゴリー構造に位置付けるかは今後の課題とする。

6.2. 今後の課題

以上で本研究の知見を整理した。しかし、本研究は力動性を用いた語彙研究を試みたもので、理論分析と心理実験のデザインでは、さらに検討すべき点は多く残っている。具体的には、今後の課題として、以下の4つを提出する。

一つ目は、コーパスに基づく考察の改善である。本研究は BCCWJ の例文で分析を行ったが、少数例に基づく考察は説得力に欠けると考える。今後の研究で、意味構造分析を精緻化していくため、コーパス言語学の知見を援用し、対象用例のサンプルを抽出することを通し、より文脈的要素の特徴に注目する。また、「切る」の意味展開をさらに細かく分析し、以上の分析に立てる本研究の主張の妥当性を検証し、意味の関連性と意味展開のメカニズムを明らかにする。特に目的語項が被動作主ではない＜創造義＞はどのように位置付けるかを解明する。

二つ目としては、類型論の観点からの比較である。力動性理論は動作の参与者である主動体と対抗体における状態変化を示しているが、動作のプロセスである力の作用方式や強さなどを反映するものは管見の限りない。そのため、これらの点について別途に考察する必要がある。日本語の分断動詞群に属する他の多義動詞である「割る」、「裂く」、中国語の分断動詞「切 (qiē)」、英語の分断動詞 cut、フランス語の分断動詞 couper との比較を行い、各言語における力の概念の捉え方と力動性のパターンの違いを考察することを通し、「切る」の意味・機能をさらに明確にする。

三つ目は、心理実験による検証の改善である。本研究の心理実験の部分は試行的なものとして、さらに改善すべき作業が多く残っている。本研究で行ってきた意味のカテゴリー化という実験では、カード分類法で被験者に意味が似たカードを同一のグループに分けるように指示した。しかし、本動詞と複合動詞を区分せず同時に提示すると、純粹に意味の類似ではなく、おそらく形の類似に着目する被験者もいるため、実験の精度に影響を与えている。また、意味のカテゴリー化以外に、語の概念形成と第二言語習得研究における動詞の意味習得に関する三つの認知プロセス（松田 2000）を踏まえ、他の三つの実験を加えようと考えている。一つ目の実験では意味の典型化というプロセスに関して、母語話者と学習者の産出する用例から典型概念を推測し、産出状況を明らかにするための文産出テストを行い、すぐに思いつく短文を五つ作るように求める形式を通し、母語話者と学習者の持つ「切る」のプロトタイプ概念と獲得された直感を探る。二つ目の実験は意味の一般化というプロセスを考察する容認性判断テストである。実際の場面と特定の文脈においては、「切る」の各意味・用法がどの程度容認されるかを確認し、学習者がその多義的意味用法を十分に使用できるかを考察する。また、意味拡張の動機づけによって語義の習得の難易度が異なるかを明らかにする。三つ目の実験は形式的には二つ目の実験と同様に容認性判断テストを行うが、意味の差異化という認知プロセスに注目する。日本語の分断動詞群における類義語は同じ場面と文脈では、いずれも容認されるか、それとも、適用される場面が異なるかを明確にする。また、学習者はどのくらいそれらの類義語を使い分けることができるかを分析する。さらに、意味分析との連続性を高めるため、今後の実験デザインにおいて、力のイメージ・スキーマと概念メタファーに関するメタフォリカル・コンピテンス (MC) の検定を以上の実験と組み合

わせようと考えている。

四つ目は、日本語教育への応用の可能性である。学習者と母語話者とのプロトタイプ概念とスキーマの概念および意味構造の違いを解明する上で、母語以外の要因を探る。その要因から得られた知見で、認知意味論による実際の日本語教育の指導における応用的な側面を探る。

文献

- Kellerman, Eric. (1979). Transfer and non-transfer: Where we are now. *Studies in Second Language Acquisition*. 2(1), 37-57.
- Lakoff, George. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: what our categories reveal about the mind*. Chicago: The university of Chicago Press.
- Lakoff, George. & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago: The university of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar. Vol.1: Theoretical Perspective*. Stanford: Stanford University Press.
- Levin, Beth. (1993). *English Verb Classes and Alternations: A preliminary Investigation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Talmy, Leonard. (1985). Force dynamics in language and thought. *In papers from the twenty-First Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Talmy, Leonard. (2000). *Toward a cognitive semantics Volume2: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 今井むつみ (1993) 「外国語学習者の語彙習得における問題点：言葉の意味表象の見地から」『教育心理学研究』41(3), 245-253. 教育心理学会.
- 石川慎一郎 (2017) 「現代日本語における「デ」格の意味役割の再考—コーパス頻度調査に基づく用法記述の精緻化と認知的意味拡張モデルの検証—」『計量国語学』31(2), 99-115.
- 許永蘭 (2008) 「「切る」の多義分析」『言葉と文化』9, 303-320.
- 栗田奈美 (2018) 『視覚スキーマを用いた意味拡張動機づけの分析』春風社.
- 瀬戸賢一・山添秀剛・小田希望 (2017) 『解いて学ぶ認知意味論』大修館書店.
- 鐘慧盈 (2016) 「L2「切る」の意味構造がその習得に及ぼす影響」『日本認知言語学会論文集』16, 555-560.
- 田中茂範 (1990) 「認知意味論—英語動詞の多義の構造—」三友社出版.
- 長友和彦 (1999) 「第二言語としての日本語習得研究—概観, 展望, 本科学研究の位置づけ—」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』平成8年度～平成10年度基盤研究(A), 課題番号 08308019, 9-14.
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.
- 松田文子 (2000) 「日本語学習者による語彙習得：差異化・一般化・典型化の観点から」『世界の日本語教育 日本語教育論集』10, 73-89. 独立行政法人国際交流基金.
- 松田文子・黄一君 (2011) 「コア図式論を用いた中国語動詞「取(qu)」の意味記述—異文化理解を射程に入れた語彙指導の可能性に向けて—」『岡山大学大学院教育学研究科集録』146, 41-57.
- 森山新 (2012) 「認知意味論の観点からの「切る」の意味構造分析」『同日語文研究』27, 147-159.
- 森山新 (2015) 「日本語多義動詞「切る」の意味構造研究—心理的手法により内省分析を検証する—」『認知言語学研究』1, 138-155.

山梨正明（2000）『認知言語学原理』くろしお出版.

資料

MetaNet team. (2012-). MetaNet Metaphor Wiki.

https://metaphor.icsi.berkeley.edu/pub/en/index.php/MetaNet_Metaphor_Wiki.

国立国語研究所（編）（2011）「現代日本語書き言葉均衡コーパス」国立国語研究所.